

かふ、武藏よりひがしの國は大升とて、升のみに手かけをつけ、一俵に三升入、五升入、一斗入の升あり、國々在々所々にて升かはる。然所に氏康時氏に至て、關八州の升、一升にあらためらるべき旨ふれらるゝ所に百姓共先規のごとくさしおかるべき趣、訴訟申に付て相止らるゝ、武藏上總は、大かたはい原升也、伴の升、北條氏直時代まで、安藤豊前守と云者作り出す、故に安藤升共名付、伊北彌五右衛門と云者、安藤升の大小を作る、其科に依て、天正十二年十月、小田原蘆子河原にはたものにかけられたり、

〔毛吹草四〕近江

○武佐升

〔善庵隨筆〕今俗間に用ふる武佐升といふは、方四寸六分五厘、深さ二寸三分九厘八毛にて、寸積五十一寸八分六厘餘になるなり、赤松某云、そのかみ佐々木氏、江州を領する時、其國八十萬石を以、強ひて百萬石に當てんがため、秤八合の升を用ひ、江州武佐の驛に倉庫を建て、米の事を司らせしより此名あり、今濃州今須驛三輪治左衛門の家に、此升を藏せりと云々、

〔甲斐國志二國注〕耕屋

○ムサ判ト云、樹アリ、耕屋、極印ナク、小民ノ様、耕ニ所造ニテ、無造作ト云、名ナルベシ、鐵判耕ニ比スルニ、稍重テ定規慥カナラズ、武佐トハ、江州地名、天文十三年佐々

〔成形圖說十農事〕麻須略中

○武佐判量は近江武佐より出す、八合入なり、故に八合量とも唱ふ、武佐は近江の地名なり、兼良公の關の藤川記に、近江の武佐と云ふ所にやざる、武士のゆがけはたてぞ、なべこそ無佐の名は残りける、天文十三年、佐々木義實、百姓の租を納に、二合を減じて、收が爲に、近江武佐の倉にて造る所、是百姓を存恤の志にして、末代の惠政と稱せり、○中然を俗に或は之を石田量とも唱へて、石田三成、八萬石の地を十萬石に料んとて、八合入を用ひしな